

「御心に適うこと」

マルコによる福音書 14 章 32-42 節

牧師 佐々木美知夫

レントの時、私たちはすぐに十字架に苦しまれる主イエスのお姿を思い浮かべますが、今日の“ゲツセマネの祈り”に私たちは主の御苦しみをまた深く覚えるのです。

さてこの祈りの直前、過越の食事の席で主イエスはゼカリヤ書の言葉を引き、弟子達が躓いて、ここから先は自分に着き従えないと告げられます。あれだけ“私について来なさい”と言われた主が、十字架を前にしてそう言われるのです。ここから先は、主イエスが独りで担われる贖いの御業であり、それが父の御心に適うことだからです。その主がここで祈ろうとされる時、恐れと苦しみにもだえて、弟子達にも“目を覚まして自分に伴うように”と言われるのです。このお姿は私たちを驚かせます。すでに御自分の死と復活を幾度も弟子達に語られていた主が狼狽しておられるのです。私たちの罪を担い、それを贖うことが如何に恐ろしい痛みであるかを実感されています。主の十字架の御業がすでに始まっています。主はできることならこの苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと父なる神に祈られます。明らかに御自分を過越の小羊として受け取っておられるのです。しかしその祈りは「わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」と結ばれます。油絞り(ゲツセマネ)の園で、主は心と命を絞り出して祈られたのです。このお姿を見る時、私たちはこれが私の罪の贖いのためであることを謙って受け取る他はありません。自分の痛みや他者の痛みさえ負い切れない私たちに主イエスの痛みは到底受けとめられないものなのです。弟子達の姿にそれが表されています。弟子達は言い訳も出来ないほどに眠り込んでいたのです。弟子達は罪を贖われる者であり、罪の贖いは主イエスの御業だからです。弟子達は全く伴えませんでした。これは罪と滅びの前に無力な私たちの姿なのです。ここで主が担われる痛みと苦しみは説明不可能であり、誰も代われないものです。ただ私の罪を贖うことは何と恐ろしいことかを私たちは主の御苦しみに見せられるばかりです。罪と弱さを思い、反省し、悔い改めることは私たちにも出来ます。しかし罪を贖うことは私たちには出来ません。それは救い主と神の御心に委ねる他はありません。ですから罪の赦しは神から宣言されるものです。“あなたの罪は赦された。私はあなたを贖った”という福音は、実際に恐ろしい痛みと苦しみをゲツセマネに担われ、命と心を絞り出して父の御心を十字架に受け取られた主イエスからの恵みの宣言なのです。主は人間の生涯と労苦、歴史と社会に於ける人の罪、解決のつかない多くの災いまでもその身に担い、何よりも神に背を向ける私たちの罪を神の子として贖われます。この方に担われている感謝と希望、そこに私たちの立ち所があります。教会には与えられた使命があります。新しい年度、静岡草深教会が主に贖われた群れとして、使命を果たすことが出来ますよう共に祈りましょう。

(週報 2022 年 13 号より転載)